



木曽川下流自然観察会

<http://owari.eco.coocan.jp/kisogawa.html>

日時 2020年1月12日(日)9:30~12:00(曇り)

参加者 一般:3名(うち子ども0名)、

指導員:4名

テーマ 「生き物たちの冬越し」

冬の観察の定番の冬芽・葉痕やロゼットを見ながら川原から園内を回りました。

高水敷では隣り合ってセンダンとシンジュが生えていましたので、幹の葉痕と冬芽を比べてみました。葉痕はセンダンが山羊の顔のような形状で、シンジュはハート形です。センダンの冬芽は細かな毛が密集していますが、よく見ると3つに分かれていて鱗芽であることがわかります。近くにあったオニグルミの冬芽は毛に覆われた裸芽でした。

ちょっと見たところではよく似ているブタナとヒメブタナのロゼットですが、葉の表面に生えた毛の多寡で手触りまで異なり、見分けは容易です。ほかにもアレチマツヨイグサやスイバのロゼットなどを見比べました。

昆虫ではハマナスの茎についたイセリアカイガラムシが白色で目立ちました。オーストラリア原産のカメムシ目の昆虫です。小さく地味な虫なので、普段注目することはほとんどないのですが、この日はルーペを使ってしっかり観察しました。全身白い粉をまぶしたように見えますが、前半分は虫の体で、後半分には筋状の凹凸がありその中にはオレンジ色の楕円形の卵が詰まっていた。この辺りではどういう訳かみは見られないようです。一時期、大繁殖し果樹の害虫として問題になったということですが、オーストラリアから天敵のベダリアテントウを導入してから、個体数が安定したということです。しかし、翅のないこの虫がどのようにして移動して生息域を広げるのか不思議でなりません。

エノキの幹にいたヨコツナサシガメの幼態の集団を見た後、参加者の一人がエノキの根元の落ち葉をめくってゴマダラチョウの越冬幼虫を見つけてくれました。

花はというと、真冬ですが既にミヤマウグイスカグラやベニバナトキワマンサクは花を咲かせ、川原のトサミズキも蕾が膨らんでいました。来月には早春の花が何種類か見られるものと思われます。(報告:齋竹)

<その他観察できたもの>

鳥:ツグミ、シメ、カワラヒワ、アオジ、ホオジロ、アオサギ、トビ、キジバト、ヒヨドリ、ハクセキレイ、ムクドリ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ウグイス(声)、メジロ(声)、ジョウビタキ(声)、コゲラ(声)、セグロセキレイ(声)

虫:オオカマキリ(卵)

花:セイヨウタンポポ、ヤブツバキ、ユキヤナギ、シャリンバイ

実:サンシュユ、シロダモ、センダン、クロガネモチ



(咲き始めたミヤマウグイスカグラを観察)



センダンの冬芽と葉痕



アレチマツヨイグサのロゼット



イセリアカイガラムシとその卵



越冬中のゴマダラチョウ幼虫